

## 6. その他のバイオマス

### 6-2. 地域における原材料の量の把握

#### 6-2-2. もみがら

もみがらについては、畜舎敷き料として用いられている（農水省推定では、208万トンのうち88万トンが畜舎敷き料）が、稻わらよりはバイオマスで利用できる割合が多いと推定される。ただし、利用可能量のばらつきが大きい。ここでは、経済産業省推定と、農水省推定（焼却に回されている分）の中間の割合、20.9%とする（27.9%と13.9%の中間値）。

1996年の日本の米の生産量は、15,700,000トンである。稻わらの発生量は農水省推定値の955万トンを使用した。

$$9,550,000 \text{トン} / 15,700,000 \text{トン} = \text{米生産トン当たり稻わら率} = 0.608$$

$$\text{各地域での米の生産量} \times 0.608 = \text{稻わらの発生量}$$

$$\text{実際に利用できる量} = \text{稻わらの発生量} \times 0.10$$

同様にもみ殻の発生量は208万トンである。

$$2,080,000 \text{トン} / 15,700,000 \text{トン} = \text{米生産トン当たりもみがら率} = 0.132$$

$$\text{各地域での米の生産量} \times 0.132 = \text{もみがらの発生量}$$

$$\text{実際に利用できる量} = \text{もみがらの発生量} \times 0.209$$